

**三菱**  
零式艦上戦闘機 21型

F-toys 1/72スケール塗装済食玩  
製作・文:政府開発援助

### 1. 零戦21型について

零式艦上戦闘機は、長距離爆撃機を護衛できる航続力の大きい護衛戦闘機を欲して、中国大陸への進出を狙っていた日本海軍が発注したものである(零戦の「零」は神武紀元2600年=西暦1940年に正式採用されたことに由来する)。この機体に対しては(航続力は当然として)困難とも思える程の空戦能力(運動性)と火力、更には速力が要求された。三菱の堀越二郎設計主任はこれに応え、徹底した重量管理と空力洗練及び数々の新機軸の導入により稀代の傑作機・零戦の原型をまとめ上げた。

最初の量産型である11型の主翼端を折り畳めるようにして空母上での取り廻しを容易にしたのが21型で、昭和17年頃までに11型と合わせて800機余りが生産された(中島飛行機では昭和18年末頃までライセンス生産が続けられ、約2,900機が生産された)。また、戦争末期にはその優れた離着艦性能を活かして250kg爆弾を搭載できるようにした戦闘爆撃機型(爆戦)に改修された機体もあった。

現在ではリバースエンジニアリングされた機体を含めると5機以上が復元・展示されている。

### 2. 製品について

F-toysから発売されたチューインガムのおまけ(食玩)で、塗装済の部品を組み立てて水転写デカールを貼付する仕様です。この製品の一番の「売り」はこのスケールにしてラダーや主脚等多くの箇所が可動し、しかも強度と弾性のあるABS樹脂を用いることで可動の為のヒンジやリブがほとんど目立たないところです。また、エンジン架や翼内機銃なども再現されており、組み立ての過程で機体構造を詳しく知ることができます。

### 3. 製作と塗装について

はめ込み式の製品ですがほとんどの箇所を接着しています(ABS樹脂が混在している為、主にタミヤセメント流し込みタイプ速乾を使用して接着)。組み立てが進むにつれて隙間や段差が結構目立つようになり、プラペーパーを噛ませたり瓶入りサーフェーサーを擦り込んだりして埋めました。細かい部品が多く、製作中に破損しないか気を使いましたがABS樹脂の性質に助けられました。プロペラ回転軸が若干上にオフセットしているようだったので、エンジン側を開孔し直して調整し、プロペラ側にピアノ線を回転軸として接着しました。カウリング下部が切り欠かれているのが気になり、曲げグセを付けた0.3mmプラ板とハセガワのキットの排気管を複製したものをういて補いました。なお、空母搭載機ということで、クルシー航法装置(のアンテナ)を細い針金でそれらしく作り追加しています。

機体はクレオスの128番灰緑色と27番機体内部色を混合し白色を加えた調合色、カウリングはカウリング色、コクピット周りは機体内部色(三菱系)を使用(全て筆塗り)、手を加えた部分をリタッチ後、調合色を硬めの筆に少量含ませて叩き付け、色の境目をぼかしました。タミヤのスマ入れ塗料のグレーでスマ入れを行った後、ハセガワのデカールを流用してAI-155(板谷茂少佐機)としました。粗を目立たなくする為、最後に缶スプレーのつや消しクリアーを吹いています。

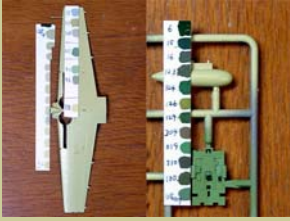


前方より



後方より

## 4. 製作過程



リタッチに備えて色合わせ。機体色は調合することになった。



エンジンとコクピットは先に仕上げる必要がある。プロペラの軸はピアノ線に変更。



カウリング下部の切り欠きを補い、排気孔とスジ彫りを追加した。



クルシー航法装置のアンテナは針金を真ちゆう線に2巻きして新造。